

豚ぶんからメタンガス

ボンベで遠隔輸送

鹿児島県垂水市と日本総合研究所など4企業は、豚ぶんを活用してバイオガスを発生させる実験プラントを、市内に建設した。今月から稼働させ、生成したガスはボンベに詰め、8月から市内にある道の駅の発電用に供給する。豚ぶんのガス化に加え、プラントから10キロ以上遠隔輸送して活用するのは、全国初の試み。地域資源の新たな活用方法として関係者の期待を集める。

鹿児島・垂水市

道の駅の発電に利用

NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）の「地域バイオマス熱利用フィールドテスト事業」で取り組んだ。総事業費は3億4000万円。2008年度までの事業で、終了後は市にプラントが引き渡される。同市は養豚が盛んで、豚ぶんの処理はこれまで堆肥（たいひ）化が中心だった。だが、堆肥は各ズ・エーシーの宮田隆さ地で生産され過剰気味で、生産者は販路確保に苦慮しており、有効活用が課題になっていた。プラントは、同市大野地区で3万3000頭を飼養する大隈養豚生産組合の敷地内に建設。ガスは豚ぶんをメタン発酵させて生産する。プラントを設計・施工したコーン

成したバイオガスの40%を占める二酸化炭素は除去し、メタン濃度を90、95%まで高めて天然ガス並みの燃焼効率を確保する。

生成したガスはボンベに詰めて、市内にある道の駅たるみずに輸送し、発電に使う。排熱は敷地内にある温泉の加温に用いる。発酵の残りかすも液肥として利用が可能だ。

大隈養豚生産組合代表の小森健二さん（42）は「地域への貢献で畜産のイメージ向上につなげた」と期待する。市も

「豚ぶんをガス化して輸送するという垂水方式の普及で、地域資源を有効活用したい」（商工観光課）と意欲的だ。